

「食」を視点としたカリキュラムの開発

教育実践高度化専攻
小学校教員養成特別コース
P09072C 来馬 恵利子

1 研究の目的

近年、朝食欠食や偏った栄養摂取等の子どもの食生活の乱れとそれに伴う肥満、過度の痩身傾向の増加などが見られ、子どもが食に関する正しい知識と望ましい食習慣を身に付けることができるよう食育を推進することが重要な課題となっている。2005年には食育基本法が施行され、学校における食育の推進が強調された。これを受け、平成20年版学習指導要領の総則において、「学校における食育の推進」が明確に位置づけられるとともに関連教科等においても食育の観点からの記述が充実している。筆者もこれまで、好き嫌いの多い児童や食事のマナーが十分に身に付いていない児童、塾通い等により食事が不規則な児童等を目にする機会があり、「食」の楽しさや大切さを理解させることの必要性を強く感じていた。その手立てとして、健康的な食習慣の形成を目的とする食べ方指導だけではなく、食品の生産や食文化の継承、さらには命のつながりなどの学習を通して「食」の多様な側面に気付かせ、実感的に「食」の大切さを学ばせることが必要であると考えた。

兵庫県の公立学校における食に関する指導実施状況調査(2005)によると、県内のほとんどの学校で食育が実施されている。しかし、指導体制の整備はこれからという状況にあり、目標を明確にしたカリキュラムのもとに指導を行っている学校は21.6%にとどまっている⁽¹⁾。このことから、一部の教員や限られた教科等での指導になっている現状がうかがえる。連携協力校での実習において、子どもたちと接する中で食に関する興味や課題などに目の前で気付けるのは学級担任であり、その学級担任が日々継続的に食育を行うこ

とが重要であると感じた。

そこで、学級担任が複数の教科の様々な場面で食育を行っていきけるようにすることを目指し、各教科を中心に「食」を視点としたカリキュラムを開発することを目的とする。

2 研究の方法

- (1)食育推進校のカリキュラムの実践事例を分析し、カリキュラム開発の基本方針を設定する。
- (2)学習指導要領から各教科の目標や内容と食育との関連を明らかにする。
- (3)「食」と関連のある各教科の教科書の単元等を抽出し、整理する。
- (4)「食」を視点とした第1学年の年間カリキュラムを開発する。
- (5)カリキュラムの一部を実践した結果を考察する。実践対象は、K市立U小学校第1学年、11名(男子4名、女子7名)である。

3 研究報告書の構成

序章 研究の目的と方法

第I章 学校教育における食育の位置付け

第II章 カリキュラム開発の方向性

第III章 カリキュラム開発に向けた基礎事項の整理

第IV章 「食」を視点としたカリキュラム開発の実際

終章 研究の成果と課題

4 研究報告書の概要

序章では、本研究の動機と目的、研究の方法と対象を示した。

第I章では、児童の実態や国の施策に基づいて学校教育における食育の位置づけを明らかにした。

第II章では、先進的に食育を実践している小学

校のカリキュラム分析の結果を踏まえ、カリキュラム開発の基本方針を示した。課題として、カリキュラムに示されている食育の関連教科の単元等と食育の目標との対応が不明確なものが多いことから、文部科学省が示す食育の目標②を参照し、六つの「食」の視点をカリキュラム中の単元等に付記することにより、対応を明らかにすることとした。「食」の視点は、① 食事の重要性、② 心身の健康、③ 食品を選択する能力、④ 感謝の心、⑤ 社会性、⑥ 食文化である。

第Ⅲ章では、カリキュラム開発の前に文献研究により発達の特性に応じた食育の在り方を把握した。次に、学習指導要領における各教科の目標・内容と食育の関連、教科書の「食」に関連する単元等の整理を行った。各教科の学習内容と食育の関連性を分析することにより、各教科の特質を生かした食育の在り方が明らかになった。

そして、第Ⅳ章において、それらをもとにカリキュラム開発を行った。目標は、「食」の六つの視点ごとに設定した。表1は第1学年の年間カリキュラムの一部である。この中の、算数と道徳の授業を連携協力校で実践した。この実践から、各教科との関連性を図ることの重要性を実感した。また、児童にとって「食」は身近なものであるため、意欲を高め、教科の目標をより達成することも期待できることが確認できた。

5 研究の成果

研究の成果は、主に以下の三点が挙げられる。第一に、小学校において食育を行うことの重要性を再認識できたことである。第二に、「食」の視点をフレームワークとして構築し、カリキュラムを示せたことである。六つの「食」の視点ごとに目標を設定し、カリキュラム中の単元等に「食」の視点を付記することにより、各学習が食育のどの目標に迫るものなのかを明確にすることができた。これは、学級担任が各教科で食育を行う際、教科の目標を達成しながら、同時に食育のどの内容について学ばせることができるのかがわかり、

表1 「食」を視点としたカリキュラム(1・2月抜粋)

	1月	2月
生活	○わくわくふゆがやってきた ・夏と比較しながら、冬の生活の様子を振り返り、季節の違いによって食生活が変化することに気付くことができる。(選) (文) ・七草がゆの由来を知り、つくって食べることで、伝統的な食文化に親しみを持つことができる。(文)(健)	○たのしかったね1年かん ・1年間の自分の食生活や食に関する学習について振り返ることにより成長を感じ、2年生への意欲を持つことができる。(重)
国語	○ものの名まえ ・知っている食べ物の名前を共有したり、給食の食材の仲間分けをしたりすることによって、食べ物の名前(下位語)や仲間(上位語)を知ることができる。(選)	○おみせやさんごっこしよう ・店の人と客とを体験することによって、売り手の工夫や買い手の適切な注文の仕方に関心することができる。(選) ○どうぶつのおしゃべり ・動物のおしゃべりに興味を持ち、命のつながりに気付くことができる。(重)(感)
算数	○大きいかず(おかいものごっこ) ・身近な料理の材料をお金の模型を使って購入する活動を通して、実生活で正確に買い物ができるようになる。(選)	
図音		
道徳	○いただきます 2-(4)尊敬・感謝 ・たくさんの方が仕事をしてくれているおかげで給食ができるということを知り、感謝の気持ちを持つことができる。(感)	
学活	○かぜにまけない元気な体 ・三色栄養を学ぶことによって、食品をバランスよく食べる大切さを理解することができる。(健)	○じぶんの中にあるおにをおいだそう ・季節に応じた伝統的な食に関する行事に親しみを持つことができる。(文)

意図的に食育を進められることにつながると考える。第三に、児童や学校、地域の実態を踏まえてカリキュラム開発をすることの重要性を認識できたことである。学校や地域の特色を生かすことで、その学校にしかできない魅力的な食育が行えるはずである。

6 今後の課題

今後の課題は、学年を広げてカリキュラムを開発し、6年間を通して継続的・系統的に食育を行うこと、本研究のカリキュラムを実践し、有効性を検証すること、評価についての検討を行うことが挙げられる。そして、学校現場で今後も「食」を視点とした研究を継続していきたい。

【註】

(1)兵庫県教育委員会『学校における食育実践プログラム』2007,p.5

(2)文部科学省『食に関する指導の手引き』2007, pp.7-8

修学指導教員 關 浩和